

## 序 論

## 一元から多元に広がる関係へ

永 田 貴 聖

(国立民族学博物館／立命館大学生存学研究センター)

## 1. これまでの研究会の変遷

現代社会エスノグラフィ研究会は、立命館大学生存学研究センターの支援を得て、2013年度から現在まで継続して行われている研究プロジェクトである。立命館大学大学院先端総合学術研究科博士課程の院生や修了生たちを中心としつつ、フィールド調査を実施している社会学者と文化人類学者たちがメンバーとして名を連ねている。2013年度から2015年度までは、若手強化型の枠組みにおいて、2013年度「現代社会における生の技法を記述するためのエスノグラフィ的方法論の探求」、2014年度と2015年度は「現代社会におけるエスノグラフィ方法論—「生の技法」記述への探求」を課題としてきた。この間、本研究会では、フィールドワーカーたちが集い、これまで「生存学」が築き上げてきた「障、老、病、異」に関連する歴史的叙述に対抗する、現在進行形で生きる人々への「生の技法」への記述的試みを模索してきた。

2007年度秋から2011年度まで、採択された文部科学省グローバルCOEプログラム「〈生存学〉創成拠点」、またその後継発展事業である立命館大学生存学研究センターは、「障、老、病、異」にかかわる文献研究、史資料分析、社会学的分析の方法論が用いられ、いわゆる過去から現在へという時間軸を叙述する研究を蓄積してきた。従来、これらの社会学、文化人類学の研究は、それぞれの学問分野においては中心的議題ではなかった。しかし、「生存学」はこれらの課題を中心的課題に押し上げたと言ってよいだろう。

本研究会では、「生存学」が、これまで取り組んできた「障、老、病、異」に深くかかわる、医療現場、当事者集団、社会運動体、国境を越えたNGO活動などを対象とする事例研究への成果を、さらに深化させるため、現在進行形の時間軸で生きる人々の「生の技法」を捉えることを可能とする民族誌学的方法論の検討を継続してきた。

具体的には、文化人類学におけるフィールド調査及び社会学の質的調査の方法を導入し、ある特定の集団や、社

会関係、帰属意識、自己認識などがいかにして生成し、変容しているのかという点を「生の技法」という視点から明らかにし、記述する方法論を構築することであった。

そして、2016年度から2017年度にかけて、生存学研究センター「研究プロジェクト」という新たな支援枠組みを基盤として、課題「生の技法の人文社会学—「当事者」から多元的に広がる関係へ」と設定した。これまで本研究会は「生の技法」への民族誌学的方法論の検討と記述への試みを議論してきた。この枠組みに加え主に次の2点を課題とした。①「当事者」概念をある特定の烙印化や、アイデンティティを備えた存在だけではなく、その周囲を含めた幅広い社会関係を再検討すること、②特定のアイデンティティを基盤とする一元的な関係が、一つの共通項を軸としながら、より緩やかで多元的に広がっていく過程を検討することである。

2013年度より、本研究会では、当事者集団、運動体、さらにそれらを支える家族、支援者、周囲で活動に参加するアクション・リサーチなどに焦点を当て、合計8回の研究会を実施してきた。2016年度は、4回の研究会を開催し、その多くが本特集の論考となっている。

## 2. なぜ『「当事者」から多元的に広がる関係』に注目するのか？

本特集の編者である筆者は、これまで「トランスナショナルリズム」の枠組みを用いて、日本に移住したフィリピン人たちが、出身地域や他の国民国家に移住した家族・友人たちと関係を継続する動向に注目してきた（永田2011、2016）。つまり、世界に散在する同じ出自をもつ民族や国民が関係し、複数の移住先間が世界的に結ばれるネットワークに焦点を当ててきた。

「トランスナショナルリズム」の枠組みの導入により、移民が出身地から移動した移住先の社会に適応・同化することを前提とする移民研究の分析枠組みは大きく変貌したのは確かであろう。しかし、「トランスナショナルリズム」は、移民が出身先と関係を継続し、帰属意識を持ち続け

ること、帰属意識を基盤とする移民の世界ネットワークの存在を過度に強調するという弱点もまた備えている。これは、従来の研究に多くみられる同じ移住先に住む同じ出自の移住者同士が関係を形成することや、エスニック空間を構築する側面を強調した世界版の応用にすぎないという解釈もできる<sup>1)</sup>。だが、移民は、状況に応じて、移住先社会の人びとや他の出自をもつ移民たちと協働すること、他国出身の移民たちが作り出した資源を活用する生活を実践している。筆者がこれまで関わってきた在日フィリピン人たちの多くが日本において日本人男性との国際結婚により移住してきた女性たちである。これらの人びとの多くは家族や地域社会の中で唯一の外国人というマイノリティとして、他の人びとと関係を結ぶ必要に迫られてきた。一方、同国人同士の自助活動として、多くのフィリピン人が信仰するカトリック教会において「フィリピン人」同士で構成されるグループを形成している。これらのグループには、フィリピン人だけではなく、日本人の支援者や配偶者などが関係している。さらに、地域の教会や宗教関連の施設によっては、フィリピン以外を出自とする海外移住者もその関係に含まれている。この様なことは日本だけではなく、日曜日、韓国において多くのフィリピン人移住者が集まるヘファ・カトリック教会のタガログ語ミサの周辺にもみられる。ミサだけではなく、教会前や周辺には多くのフィリピン人が集まり、フィリピン人向けの商店や、現地人向けの食堂の一部では日曜日限定でフィリピン料理のメニューがある。また、露店の経営者の多くがフィリピン人女性と韓国人男性の国際結婚夫婦である。そして、露店の場所を確保するための行政との交渉役は韓国人である。さらに、他国出身の移住者がパートタイムの仕事で店を手伝うということもある。つまり、そこはもはや「フィリピン人」だけが集まる空間ではない。「フィリピン」という象徴をもとにフィリピン人を中心とする多様な人びとが集まる時限的な空間となっているのである(永田 2016)。

筆者は、多様な人びとがこの様な一つの象徴や属性のもとに同一化され、関係が広がることを想定する必要性を強く感じる。特に、これまでの「生存学」における研究や本研究会が目にする当事者集団、運動体、さらにそれらを支える家族、支援者、周囲で活動に参加するアクション・リサーチなどにはその傾向が強く、関係の広がりを見ることはその運動等の全貌を解明するうえでも重要な作業であるだろう。

筆者の専門である海外移住者や移民の事例で恐縮であるが、例えば、河上の研究がある。これは、サンフラン

シスコの日本人街に付近に住むコリアン移民たちが日系人によって形成された日本人街にコリア系のレストランを出店させることや、日本による朝鮮半島植民地経験を持ち、日本語がある程度話せる高齢移民たちが、運営基盤がそれほど強固ではないコリア系のデイサービス活動よりもむしろ日系団体が運営するデイサービス活動を利用することなどに注目している。つまり、多様な人びとが互いの帰属意識を問わずに、状況とある時の関心にに応じて関わりあう「アフィニティ空間 (Affinity Space)」が民族誌として記述されている(河上 2014)。

また、ベルは多国籍な移住労働者が働く韓国安山市のカンボジア人労働者運動団体が形成される過程に注目し、韓国人の支援者だけではなく、カンボジア人以外の複数国の労働者たちが協働することを記述した(ベル 2016)。

さらに、近年の日本における、新規来日の労働系の外国人移住者ではなく、戦前から日本に居住している在日韓国・朝鮮人を標的としている在特会などによる排外主義者たちが行う「ヘイトスピーチ」に反対する多様性を認める人びとの集まりに注目した研究などがある。橋口は、いわゆるこういった「カウンター」活動の問題点や失敗点を労働運動研究の立場から批判しつつも、多様性を認めるための運動を展開することや、日本政府が認めていない朝鮮学校の高校無償化適応支援などを支える日本人支援者たちの集まりや関係の形成を分析している(橋口 2016)。

一部の文化人類学においてつぎの様な関係への分析が目ざされつつある。現代の社会関係が日々流動的に変化し、ある存在が日常的に液状のように現れ、消える状況において、移民コミュニティの社会関係のような流動的で境界線が見えにくい集団が存在する(Amit& Rapport 2012)。日常的に起こる離合集散に焦点を当てるには、基本的に関わりが絶たれた状態(Amit& Rapport 2012)、付随的不確実性(ibid.)からなる関係に注目する必要がある。アミットとラポルトは移民コミュニティを「アソシエーション (association)」という固定的な関係としてみるのではなく、緩やかに離合集散する「コンソシエーション (consociation)」としてみることを論じている(ibid.)。

これらの論に依拠すると、これまで生存学において注目されてきた社会的に周辺に位置するだろう人びとが展開する「生の技法」を実践するための運動やアクションは、もちろん、ある烙印を背負った当事者が中心であるのは確かである。しかし、それはあくまでも中心であっ

て、ある社会関係の「一部」にしかすぎないと言っても過言ではない。さらに、なぜ、その周囲に集まる人びとはある人びとに共感し、その社会関係とつながる存在になるのだろうか。そのような関係の広がりの中で、研究者が焦点を当てる部分も一部にしかすぎない。本特集ではその一部に焦点を当てることに徹したい。

### 3. 「巻き込まれる」研究者の存在

本研究会ならびに本特集の争点の一つである「「当事者」概念をある特定の烙印化や、アイデンティティを備えた存在だけではなく、その周囲を含めた幅広い社会関係を再検討する」にあたり、当然考えなければならないのは、社会運動や活動など幅広い社会関係の中における研究者の立ち位置である。かつて、文化人類学において、クリフォードとマーカスは文化人類学者が民族誌を書き、他者を一方的に解釈する権力性に潜む暴力や虚構が批判した (Clifford, Marcus 1986)。しかし、マーカスはこのような文化人類学者がもつ表象する能力を活用し、大きな権力を持った世界銀行のようなグローバル・エージェントを結びつけるネットワークを解明することを射程に入れた「マルチサイティッド・エスノグラフィ (Multi-sited ethnography) (Marcus 1998: 231)」の可能性を提案している。

この提案のあと、多くの文化人類学者たちがさまざまな試みを行っている。その詳細は別の機会に議論することとするが、調査対象となる人びとや社会からの要望や申し出に応じて、調査者自身が調査対象とする集団や社会の人びとの活動に関与してゆこうという動きが存在する。

例えば、清水 (2013) はフィリピン北部の山地にあるイフガオ州パバオ村出身での草の根植林運動のキャンペーンを行うことになった。清水が日本でのキャンペーン活動を担うようになったきっかけは、長年の友人であるキッドラッド・タヒミックという映像作家に誘われたことである。タヒミックはパバオ村出身であり、その運動をすすめるリーダーのひとりである。清水はこのような運動に関わることについて、「現地の状況や運動に巻き込まれてゆかざるをえない人類学 (あるいは進んでコミットしてゆく人類学) の可能性」(清水 2013:19) と表現している。

そして、本特集の編者である筆者自身も、結果的にこれと似たような動きを研究の中で行っている。それも積極的ではなく「巻き込まれる」形である。それは、筆

者の大学院時代の同僚である某都市社会学者からの提案であった。この研究者が活動し研究する京都駅南側にある東九条地域は被差別部落と在日コリアンが集住している地域である。当時、この地域にある彼の調査先であるカトリック系の社会福祉法人によって運営されている多文化交流施設が筆者にあることで仲介役になってほしいということだった。その内容は、筆者が彼らに京都市内で活動しているカトリック教会を基盤としているフィリピン人グループを紹介し、グループが施設を利用してほしいというものであった。彼は筆者が長年そのフィリピン人グループと関わっていることをよく知っていた。結局、筆者は仲介の役割を果たすことになり、この施設には多くのフィリピン人が集まるようになった<sup>2)</sup>。

さらに、そこに集まるフィリピン人たちは、地域に住む在日コリアンたちと交流を開始した。現在では、フィリピン人たちは在日コリアンを中心とする地域におけるさまざまなマイノリティが朝鮮半島ルーツの民族芸能文化により自己表現を行う祭りである「東九条マダン」に演奏者として参加している。筆者はここで演奏するフィリピン人に誘われる形で、やはり「東九条マダン」と関わるようになった。この動きからもわかるように研究者が「巻き込まれる」ことにより関係の一部となることもある。

### 4. 本特集の構成と内容紹介

本特集は、これまで本研究会において研究報告を行った20代後半から40代前半という比較的若手と呼ばれる、文化人類学と社会学双方のフィールドワーカーたちによって執筆されている。ここでその内容を紹介したい。

浜田論文は、2000年代以降に文化人類学において注目を集めている「存在論的転回」という理論的な動向を検討した。そのうえで、文化人類学者はフィールドワークにおいて、そこで生活する人びとについての文化人類学者自身の解釈を提示するのではなく、人びとが行うさまざまな事象に対する説明や解釈を人びとから学ぶというやりとりを行う必要性を述べている。つまり、文化人類学者が認識している事象ではなく、フィールドの人びとが日常的に接している存在そのものに注目するという「認識論」から「存在論」への移行を論じている。さらに、浜田は、その移行において重要なこととして、文化人類学者が注目する事象は異なるまとまりとして存在しつつ、互いに重なり合うことがない状態から、完全に同じではないが完全に異なる状態ではないと考えている。こ

の「一より多いが、多より少ない」状態が「ポスト多元主義」として部分的に重なり合う状態として想定されると論じられている。そして、文化人類学のフィールドワークにおいて記述されたエスノグラフィこそがこの部分的な重なりや、そこから派生してみえる複雑なイメージを喚起するものであるべきだと強調されている。

浜田論文によるエスノグラフィ解釈は、本特集の争点である「当事者」に派生して広がる関係に焦点を当てるうえで必要不可欠な視点と立ち位置を提供している。

山口の実践報告は、1990年代後半に宮城県仙台市において設立された「パラム（韓国朝鮮語で「風」の意味）せんだい」という15名程度という小規模な集団に注目したものである。「パラムせんだい」では、在日朝鮮人と日本人が集まり、在日朝鮮人の被差別体験や、民族名と日本人の名称問題などを議論する「集い」が開催されている。山口はメンバーの在日朝鮮人が被差別体験などを語るなどスティグマを抱える表象を行うとき、そのような体験がない日本人メンバーはそれを理解できないという「断絶」があった。しかし、「対話」を通じて日本人メンバーが〈わがこと化〉する過程を検討している。

このような対話事例に着目して山口は、在日朝鮮人「当事者」と支援する日本人という運動図式とは異なる、在日朝鮮人の「当事者」性が、周囲で生活する身近な日本人たちへと波及する動きを描いている。

原論文では、原自身が研究に至るまでのフィリピン留学経験、のちに研究者として日比を往来するフィリピン人女性やフィリピンルーツの若者を対象として調査を行うまでの過程が焦点となっている。原はフィールドワークを通じて研究協力者であるフィリピン人女性や若者たちとの関わりの中で原自身が調査対象社会の境を架橋している様子を一つの事例として捉えている。そして、研究者として調査する「自」がいかに「他」の社会と密接に交流し、いかにそれがエスノグラフィに影響するのかを検討している。

原論文は、多くの文化人類学者と社会学者が経験しながらも、あまり述べられることがない研究対象を設定する以前の原自身の経験とその後の調査対象者との関係に関連づけている論考である。そして、そこには研究者としての調査対象者への共感や葛藤が多く含まれている。

今里論文は日本人の母親とニューカマー韓国人の父親を持つ日本で生まれ育った日韓ダブルの若者の経験に焦点を当てつつ、その若者と同世代の調査者である今里自身との関わりに注目している。今里は、自身が非当事者の立場として行っている日韓ダブルの若者の「アイデン

ティティ」にかかわる調査が、調査対象者による「アイデンティティ」の語りによつてどのような影響を及ぼしたかについて自己批判的に検討している。

山本論文は、2010年排外主義団体によって行われた京都市東九条地域にある朝鮮第一初級学校襲撃事件、そして、その後の朝鮮学校裁判支援のために集まった人びとの集団性、また、現在の東九条地域における差別や排除の抗する住民運動に焦点を当てている。山本は日本人、朝鮮人、在日コリアン等々それぞれの立場を越えた連帯が一部では行われつつも、運動に関与する研究者の立場からその動きが決して十分ではないことを論じている。特に、事件後、他地域にある第三初級学校との統合のために地域を離れることになる第一初級学校がかつて授業などで利用していた勸進橋児童公園周辺の地域コミュニティとの関係に注目している。襲撃後、朝鮮学校と地域コミュニティの関係が断絶されたままであることを大きな問題として指摘している。

山本が論じる運動における立場を越えた連帯の可能性、また、地域コミュニティにおける排外行為防止のための取り組みの限界は、人びとがつながりながらもすべてが繋がれないことを表したものであろう。

繰り返しになるが、本特集では、これらの論考により、次の2つの課題について議論したい。ひとつは「当事者」概念をある特定の烙印化や、アイデンティティを備えた存在だけではなく、その周囲を含めた幅広い社会関係を再検討することであり、もうひとつは特定のアイデンティティを基盤とする一元的な関係が、一つの共通項を軸としながら、より緩やかで多角的に広がっていく過程を検討することである。

#### 注

- 1) ただし、韓国在住フィリピン人の調査において、フィリピン人グループの関係者のかつての隣人が日本における筆者の調査インフォーマントだったことがある。「トランスナショナル」枠組みの調査から関係が偶然的に確認できることもある。詳しくは永田（2014）を参照されたい。
- 2) この詳細は永田（2017）を参照されたい。

#### 参考文献

- Amit, Vered. & Rapport, Nigel 2012 *Community, Cosmopolitanism, and the Problem Of Human Commonality*. Pluto Press. Kindle Version
- 河上幸子. 2014『在米コリアンのサンフランシスコ日本街一境界領域の人類学』御茶の水書房。
- Clifford, J. and G. E. Marcus (eds.) 1986 *Writing Culture: the poetics*

- and politics of ethnography*. University of California Press. (クリフォード、マーカス編. 1996『文化を書く』春日直樹他訳、紀伊国屋書店)
- 清水展. 2013『草の根グローバリゼーション——世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学出版会。
- 永田貴聖. 2011『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版。
- 永田貴聖. 2014「トランスナショナル・コミュニティ」『世界民族百科事典』国立民族学博物館（編）pp.568-569 丸善出版。
- 永田貴聖. 2016「日本・韓国のフィリピン人たちによる複数の国家・国民とかかわる実践」『「国家」を超えるとは一民族・ジェンダー・宗教』黒木雅子・李恩子編 pp.151-199 新幹社。
- 永田貴聖. 2017「巻き込まれてゆくことからみえる在日フィリピン人移住者たちの社会関係」『異貌の同時代—人類・学・の外へ』（渡辺公三・石田智恵・富田敬大 編）pp.309-338 以文社
- 橋口昌治. 2016「得体の知れないものとの闘い——「カウンター」黎明期の問題意識と方法について」『生存学』Vol.9 pp.26-43 生活書院（立命館大学生存学研究センター編）
- Marcus, George E. 1998 *Ethnography through Thick and Thin*. U.S.A., Princeton University Press.
- ベル裕紀. 2016「通り過ぎること、埋め込まれること—韓国・安山市におけるカンボジア人移住労働者団体の設立過程を事例として」『年報人類学研究』6：104-131。

